

- 夏季セミナー・大学院生サマースクール 2020 報告「言語・文学・社会—国際日本研究の試み—」  
The Summer Seminar and PhD Students Summer School 2020 Language, Culture, Society: Constructive approach to International Japanese Studies'…… P1
- 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回研究会  
Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages Workshop …………… P3
- 東アジア連続講演会  
An East Asia Lecture Series …………… P5
- 活動予定 …………… P5

## 夏季セミナー・大学院生サマースクール 2020 報告 「言語・文学・社会—国際日本研究の試み—」

### 夏季セミナー報告 特設セッション「Covid-19 下の人文学」

2020年度の夏季セミナーは、「言語・文学・社会—国際日本研究の試み」のテーマのもと、2020年9月4日・5日の両日にわたって開催された。また、9月6日には大学院生によるサマースクール研究発表会も開催された。Covid-19の世界的流行のもとで、オンラインによる開催となり、例年とは大きく異なる形態となった。しかしこの状況のなかでも、海外の研究者からの報告、院生発表など、有意義かつ活発な研究交流を実現することができた。

今回の夏季セミナーでは、現状をふまえて、特設セッション「Covid-19 下の人文学」を設け、海外から4人の研究者の報告を受けた。ここでは4つの報告を要約して紹介する。いずれもアクチュアルな報告であり、貴重な提言となっていると考える。とりわけ、いずれの報告でも、デジタル環境の充実とともに、学生の自立/自律学習をいかに実現するかに比重が置かれている点が興味深いだろう。さらにコルネリッセン教授からの報告にあるように、社会の不平等にとりくむ人文学が必要であることも、あらためて確認できるだろう。(友常)

### 報告① 尹鎬淑(サイバー韓国外国語大学校)「ポストコロナ時代のオンライン教育とこれからの日本語教育」

韓国におけるコロナ19によるオフライン大学で前例なく実施されたオンライン方式の1学期の授業は、オンライン授業の出席率98.9%という記録を打ち立てた。しかし、登校授業の同時実施により集中力の低下、学生ごとのフィードバックの限界など、学習格差による学力の両極化の問題及び基礎学力の低下と、対面を通じて行われる情操教育を行うことができていないという指摘も出てきている。また突然開始された非対面オンライン授業は、学生たちから「PPTだけ読めば終わる」「ずさんな授業の上に画質や音質も最悪」「PPTスライドに教授の声だけを重ね合わせた授業」など否定的な評価と合わせて、「授業料返還」要求が殺到した。他にも、You Tubeの動画をそのままオンライン授業に利用するケースや、かなり以前に制作され

た動画講義をそのまま授業に利用するケースもみられた。

また、遠隔授業の最も大きな問題点として、システムと学習の質の低下とともに評価の公正性があげられる。大部分の大学が評価の公正性のため対面試験を実施したが、成績インフレーションが発生しており、就職市場では学生たちの成績を信頼できない企業も出てくるだろうと予想されている。

一方、教育部はオンライン授業関連の評価を類型化して提示しているが、評価に対する根本的な解決策が求められる。

韓国教育部は、以上のような問題点を補うために訓令で遠隔授業管理委員会及び遠隔教育支援センターを設置し、大学のオンライン授業の質の管理を行っていきと発表した。また各大学は、優秀な講義事例を共有し、サーバーの増設と学習管理システム(LMS)の再整備を行っている。このような計画の下で、各大学は基礎学力低下を防ぎ、学生ごとの学習習熟度をあげるオーダーメイド型講義を提供するための方法を検討している。実際に学生の学習習熟度を上げるために、AIを活用した学生ごとのオーダーメイド型教育実現(HTHT, High Touch High Tech)のための大学コンソーシアムがスタートした。これ以外にも、ASU(Arizona State University)は、オーダーメイド型学習のためのAIであるアレックス(ALEKS)を活用し、学生の学習習熟度が62%から79%へと向上したとしている。

これら以外にも、非対面オンライン授業の問題解決の方法で自己主導型学習のためのオーダーメイド型個別学習サポート、デジタルの革新、ビッグデータの分析プラットフォーム、ハイブリッドマルチクラウド、体系的なカリキュラムを基盤とした良質な講義コンテンツと多様なモバイルラーニングプログラム、教授とのリアルタイムチャットと学生に合わせたクイズを通じた学生の理解度チェック、授業への集中力の向上、パソコン、モバイル、タブレットなどのウェブ・アプリを通じた動画講義、リアルタイム講義の途中で理解が足りなかった内容に対する授業科目や教授音声、字幕まで検索できる「スマート検索」の活用などを上げることができる。

今回のコロナ19によって多くの試行錯誤が行われるだろう

が、教育界の進展が今までになく早くなるだろう。オンライン教育を広げていくことを超えて、5G 超高速インターネットが成熟期に入り、スマート機器を通じて、AR や VR 教育が全般的に実現している。

### ②タサニー・メタピシット (タマサート大学) 「ニューノーマル時代のオンライン教育とこれからの日本語教育の変化」

タイでは、IT 環境が整っていないため、学生を教室に集めることを前提としていた多くの教育機関は授業の休止を余儀なくされた。22 各大学で、3月の時点で教職員向けの実践ガイドライン及び学生向けの受講方法が発表され、授業休止の期間中に、パソコンなど必要な機材のセッティング、遠隔授業やテレワーク向けのヘッドセットの購入、オンラインミーティングライセンスの購入、アプリケーションやオンライン教育ツールの集中トレーニング、IT スタッフのサポート体制の強化、学生やスタッフとの連絡手段の見直しが行われた。

New Normal という言葉は、リーマンショック後に起きた変化に対して、非日常が新しい常態になるという文脈で使われた概念である。今回は、学校教育の場合、学生一人ひとりが自分で学び自分で成長できること、自分で考え自分で実行する力をつけられること、自分で学ぶ力を身につけられること、自分の身の回り以外に広い世界があるのを知り、その世界と自分との関係を体験すること、自分の成長を自分で実感できることを求める内容になった。

タマサート大学の実践例を紹介する。初中級日本語（1月中旬から5月まで）カリキュラム改正（2018年版）では、授業時間数が6時間から3時間に短縮し、以下の4つの課題をタスク・プロジェクトの活動として採用した。課題1：漢字カードを作ろう！一人の学生に対し、漢字3文字を与え、その漢字のインフォグラフィックを作成してもらい、日本語講座のFBに投稿してもらい、課題2：本を読んで紹介しよう！学科の図書室に所蔵しているものから一冊の日本語で書かれている本（150ページ以上の漫画、小説など）を読んで、内容を要約し、その本の印象に残るフレーズをピックアップして、インフォグラフィックの形で紹介してもらい、課題3：ニュースを聞いてみんなに伝えよう！ネット上の動画ニュースを一つ選んで、語彙を調べ、内容をタイ語でFB上に紹介してもらい、友達の投稿を見て気に入ったものがあれば、そこにコメントを書いてもらい、課題4：日本文化を調べてプレゼンしよう！グループ活動で、知りたい日本の文化、歴史などがあれば、それについて調べ、パワーポイントでまとめたものを動画の形で作成し、ズームでクラスのメンバーに紹介する。コース終了後のアンケートでは、9割以上が肯定的な評価を示した。

ニューノーマル時代を生き抜くために、教師はファシリテーターの役割を実践するべく、以下のことを努力する必要がある。1. オンライン授業では学生一人ひとりに達成感を持たせ得る学びの場を作る、2. 多方面において創造力を生かせる喜びを感じてもらい、3. 成果を可視化でき視覚に訴える工夫や仕掛けを考えていく、4. 相互に学び合え、共に成長できるような活動を常に意識する。目指すのは、学生の自律学習である。

### ③リム・ベンチャー (シンガポール国立大学) 「オンラインによる日本のパフォーマンス劇——パンデミック下でパフォーマンスを学ぶ」

オンラインによるパフォーマンス研究・教育はこの20年間で大きく変化している。デジタルテクノロジーがアカデミズムでさまざまな創造的な活動を可能にしているからである。テク

ストの内容やマルチメディアは豊富な情報を提供できるようになった。だれがインターネットリソースの創造者なのか。一般的にいて3つのカテゴリーが可能だろう。第三者機関としてのNGO、企業、そして個人である。これら三層のリソースを紹介しながら、ウェブやオンラインリソースの現状を検討しよう。たとえば能は反復からなるが、その中身は多様で深遠である。ペダゴジーからいうと、その内容を正確かつ厳密に示すことができなければならない。しかしリソースとユーザーの志向性は、能作品というよりもリソースに影響を受ける。ここで考慮しなければならないのは、著作権であり、言語であり、アクセス可能性と内容の理解可能性である。そしてデジタルツールを用いて、どのように分厚いアーカイブコレクションを使いこなすことができるのか。この点で、たとえばバーバラ・アダチのコレクションは、劇そのものの分析なしに、登場人物たちの個性やパフォーマンスの情報にアクセスすることができる。それによって調査者の問いも広げていくことが可能となる。現在において、日本の伝統的芸能のデジタルコレクションは強力であるが、調査や出版においてはそれほど強くない。情報ソースとして、教育の素材として重要であるが、アクセス可能性を高めることで、より有益な利用が可能となるはずである。こうした中で、Covid-19 流行のこの半年間は状況を大きく変えつつある。感染の始まりから、多くの演劇関連企業は新たな演劇活動のための戦略を採用しはじめた。それがデジタルテクノロジーに依拠していることは当然である。伝統芸能の世界においてもそうした試みがある。そうした事例は、これからのデジタル人文学を考えるうえで重要な参照項となるだろう。

### ④スカールレット・コルネリッセン (ステレンボッシュ大学) 「Covid-19 下における教育と人文学の挑戦と展望——南アフリカの場合」

南アフリカはアフリカ大陸でもっともパンデミックの影響を受けている。死亡率の高さ、しかし回復率の高さと検査数においては成功的である。南アフリカの教育における不平等は歴史的かつ構造的なものであるが、教育部門では、2020年3月末ではレベル5で厳格なロックダウンだった状況は、8月にはレベル2まで下げることができた。現在、教育現場では、デジタル環境は加速化して供給されているが、「リモート教育」はそのまま人口的な分割を反映している。また、コロナ流行前、国全体の三分の二の生徒たちは食糧貧困ラインにあったが、現在の学校栄養プログラムは全体の82%カバーしている。それはパンデミックが子どもの健康に深刻な影響を与えているからである。さらに留意しなければならないことは、中退あるいは休学中の子どもたちが学校に戻ってこないという事態であり、それは失業率の増大と対応している。さらに教育の質の低下、教師の教育とサポート体制の問題がある。

ステレンボッシュ大学では、緊急オンライン教育と評価プログラムをスタートさせ、すべての学部教育と一年間の学事日程をオンライン化した。そして評価システムのすべてをオンライン化した。デジタル化では最大の努力をおこない、「一人の脱落者も出さない」方針をかけた。とはいえすべての留学生やリサーチ助成金、国際プログラムが停止したため、財政的な問題に直面した。めざしていることは、社会資本の強化、社会諸機関の強化、経済、労働市場、そして教育現場での不平等に取り組むことである。その際、humanities= 人文学の基本であるヒューマンズの実現に向けた想像力の再獲得、再評価が必要であり、さらにアフリカ中心的な視点が必要である。

The 2020 Summer Seminar was held on the 4th and 5th of September, with the theme "Language, Literature, History: Constructive Approach to International Japanese Studies". Summer School research presentations were also given by graduate students on September 6th. Due to the global spread of Covid-19, this year's event was held online. Nonetheless, despite the circumstances meaningful and lively exchange was conducted, including reports from abroad from researchers and presentations by graduate students.

In this year's Summer Seminar a special session was included in light of the circumstances titled "Literary Studies under Covid-19". 4 foreign researchers offered reports, which are summarized below. All were timely and offered valuable proposals. Notably, all 4 presentations placed emphasis on the strengthening of the digital environment, as well as on how to achieve independent/autonomous learning by students. As mentioned by Professor Cornelissen in her presentation, there is also a need for the humanities to tackle inequality.

(Tomotsune Tsutomu)

Poster for the 2020 Summer Seminar titled "言語・文学・社会" (Language, Literature, Society). It lists the dates (September 4-5), times (10:00-17:30), and topics. It also includes a list of speakers and their affiliations, such as Yonekura Masahiko (University of Tokyo) and Tazawa Masahiko (University of Tsukuba).

Poster for the Summer School Research Symposium titled "サマースクール研究発表会". It features a colorful graphic and lists the program for September 4th and 5th. Topics include COVID-19, Japanese literature, and theater. Speakers include Yonekura Masahiko and Tazawa Masahiko.

Poster for the Summer School Research Symposium titled "サマースクール研究発表会". It features a colorful graphic and lists the program for September 6th. Topics include Japanese literature and theater. Speakers include Yonekura Masahiko and Tazawa Masahiko.

Poster for the 30th Research Meeting titled "『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回研究会". It lists the date (September 12th), time (14:00-17:50), and location (Zoom). It also includes a list of speakers and their affiliations, such as Yamada Hiroshi (University of Tokyo) and Sakai Tomoko (University of Tsukuba).

# 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回研究会 Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages Workshop

2020年9月12日(土) 14:00~17:50、『外国語と日本語との対照言語学的研究』第30回研究会が行われた。山田洋平氏(東京外国語大学:モンゴル語、言語学)、幸松英恵氏(東京外国語大学:日本語学、日本語文法論)の発表、最後に早津恵美子氏(名古屋外国語大学、言語学、日本語学)の講演が行われた。

以下に各発表の概要を述べる。

## 「モンゴル語族の動詞否定形式」山田洋平氏

モンゴル語族の諸言語における動詞述語の否定形式を類型論的に概観し、否定形式の歴史的变化を引き起こす要因に関する考察を行った。歴史的に見ると、モンゴル語族はもともと動詞の前に否定の意味を表す要素を置くことで否定の意味を表していたが、モンゴル語をはじめ、現代のモンゴル語族では動詞の後ろに否定の意味を表す要素が置かれるようになっていく形式が優勢となっている。

発表では、最初に、モンゴル語族の紹介を行っている。モンゴル語族はモンゴル国以外にもロシアや中国にも広がり、遠くはアフガニスタンやカスピ海沿岸にも見られる語族である。最大の言語であるモンゴル語には約600万人の話者がいる。モンゴル語をはじめモンゴル語族は、形態的には接尾辞型に、語順類型では主要部後置型に分類される。

本発表では、モンゴル語族の否定表現のうち、主節における動詞述語の極性表現で、叙述文に関する形式を考察対象とする。モンゴル語族の動詞否定形式には、動詞語幹の後ろに否定要素が現れるような後置否定型と、動詞語幹の前に否定要素が置かれる前置否定型の2種類が存在する。しかし、前置否定と後置否定は、単純に否定要素が動詞語幹より前に置かれるか後ろに置かれるかの違いだけではない。つまり、前置否定では基本的に肯定と否定とが対称的であり、否定要素の有無以外において、

その他の部分は肯定と否定に語形などの違いがない一方で、後置否定は非対称的であり、主節における動詞述語の叙述文が取りうる動詞接辞のうち、一部の定動詞接辞は否定文に現れず、それぞれ「対応する分詞接辞」に置き換える必要がある。

本発表では、モンゴル語族の中でも、前置否定と後置否定の両者が観察される両用型否の言語であるダグール語に注目を行う。ダグール語は、基本的には前置否定型であるが、後置否定型も併用されると同時に、過去時制では後置否定になるのに対し、非過去時制では前置否定が基本であるように、否定形式の使い分けが見られる。本発表では、現代ダグール語がなぜ両用型であるかという点に対して、「ダグール語がモンゴル語族の動詞否定形式の変化における過渡期にある」という仮説を提唱している。そのため、中期モンゴル語の定量的な調査を行い、もともと前置否定型であったモンゴル語族が、その北部において後置否定型に入れ替わるといった言語変化があった点を示しながら、ダグール語はまだその変化の途上で、まず過去時制において前置否定から後置否定への入れ替わりが完了し、非過去時制においては一部が後置否定になりつつある状態ではないかという考察を行っている。

(大谷直輝)

## 「近世後期江戸語のノダー現代語との対照に基づく古典語文法研究の試み」幸松英恵氏

本発表は、ノダ文の通時的な用法変遷についての調査・研究の結果がふんだんに盛り込まれた発表であった。

発表ではまずノダ文の意味と定義の確認がなされ、現代語のノダ文には「事情を表すノダ」と「事情を表さないノダ」があり、なぜ両者が共存しているのかについて、通時的な用法変遷を研究する必要性が説かれた。そのため幸松氏は本研究で近世江戸語のノダ系の表現合計930例を収集し、その用法を分析された。

分析の結果、近世江戸語のノダ文には「事情を表さない文」がないことがわかり、現代語の「事情を表さない文」はどこから来たかについての分析が引き続き行われた。ここで着目されたのが近世江戸語のノサ文である。近世江戸語にはノサ文は非常に多く、その用法は、「評価判断」・「知識の披瀝」・「意外性のある回答」という3つのタイプに分類でき、これらの用法は現代語の「事情を表さないノダ」と重なることが判明した。以上の調査・分析により、現代においては、ノサは近世のように用いられなくなっているが、その近世のノサが担っていた用法は現代語のノダで表していることが論証された。つまり、近世のノダは、現代の「事情を表すノダ文」へと変遷し、近世のノサは、現代の「事情を表さないノダ文」へと変遷した結果、現代語における共存状態が生まれたというわけである。

従来現代語研究者の間では、ノダの多義について多くの先行研究が蓄積されてはきたが、本発表で幸松氏が近世江戸語を調査した結果、新たな知見が得られたと言える。その知見とは即ち、本発表の分析結果に基づく、江戸語のサが消滅しその用法がダに集約されたように、ノサもノダに合流したことが明らかであり、そもそも別形式が担っていた「事情説明の用法」と「終助詞的用法」の関係を、ノダを出発点に合理的に説明しようとする事自体に無理があるのではないかということである。

このように本発表では、現代日本語のノダ文の研究をテーマとし、現代語の研究で何が問題になっているのかを出発点として通時的研究の必要性が主張され、近世江戸語のノダ文と近世江戸語のノサ文から現代語のノダ文への変遷の通時的分析というモデルケースの考察を通じて、古典研究が現代語研究にどのような知見をもたらすかを見事に実証した発表であった。

(三宅登之)

### 「V-(サ)セル」の使役動詞性と他動詞性 — 「V-(サ)セル」の“語彙化” 早津恵美子氏

講演の概要は以下のように要約できる。

一般に単語には文を構成する部分としての側面と、文の構成以前にレキシコンに存在する部品としての側面がある。動詞Vに(サ)セルの付いた使役動詞V-(サ)セルにも部品としての側面(部品性)と部分としての側面(部分性)がある。部品性と部分性の観点からV-(サ)セルを考察する。

まず部品性について考える。部品としての単語は既成のものとしてレキシコンに含まれると考えられるが、V-(サ)セルには、発話毎にVと(サ)セルから作られる既成性の低いもの(「園児をプールで泳がせる」など)だけでなく、V-(サ)セルの形でレキシコンの中に位置付けられる既成性の高いもの(「警察が犯人を泳がせる」「パイプをくゆらせる」など)がある。既成性の高さは、V-(サ)セルに対応する原動詞がない(「パイプをくゆらせる」と\*「パイプがくゆる」)、あるいは原動詞表現が不自然(「容疑者を泳がせる」と「?容疑者が泳ぐ」という点に明瞭に現れ

るが、以下の点にも見られる。(a)V-(サ)セルの構文的な性質が、既成性の低いV+(サ)セルと異なる場合がある。例えば「園児たちを泳がせる」は「ゆっくり」のような原動詞の動作の様態を表す成分などと共起できるが、「犯人を泳がせる」はできない。(b)「写真を胸に忍ばせる」は「入れる/隠し持つ」という他動詞に近く、「犯人を泳がせる」「世間を騒がせる」などには類義の他動詞がない。このようなV-(サ)セルは既成の要素として他動詞の語彙体系を豊かにしている。(c)「知らせる」「合わせる」「聞かせる」「持たせる」など多くの国語辞書での立項されているV-(サ)セルがある。これらの既成性の高いものだけでなく、「全員に情報を行き渡らせる」(「情報が行き渡る」)のように対応する原動詞表現が自然で、既成性が低く分析性・透明性のあるV-(サ)セルにも、「伝える/説明する/広める」との類義関係によって、他動詞からなる語彙体系を豊かにしているという側面がある。

次に文の構成要素としてのV-(サ)セルの側面、すなわち部分性について考える。「囚人たちを黙って歩かせる」では下線部は原動詞「歩く」を修飾しているが、「病人や老人をかまうことなく歩かせる」の下線部は使役動詞「歩かせる」を修飾している。このように、既成性の低いV-(サ)セルでも具体的な文の中では、文の述語としての構文機能の面だけでなく、意味的な被修飾性の面でも一単位性が発揮されることがある。また、「彼は美人画を描かせれば当代一だ」の使役動詞は、「においては」「の面では」という後置詞に近くなっている。具体的な文中におけるこのような使役動詞性の変容にも、文の成分としてのV-(サ)セルの一単位性をみることができる。

早津氏は部品性と部分性という観点からの考察を通じて、V-(サ)セルに「語形づくり(form formation)」による使役動詞性の明白なもの「単語づくり(word formation)」による他動詞性をもつ(あるいはもちつつある)ものがあることを豊富な用例に基づいて明確に示し、多数を成す前者には部品性はないが部分性は認められ、後者は部品性も部分性も備わっていると特徴づけた。さらに、日本語研究における「使役」研究の性格には文法論(使役文の研究)の側面と語彙論(使役動詞の研究)の側面とがあり、語彙論と文法論が「単語」を媒介としてつながっているように、V-(サ)セルを通して「使役」の文法論と語彙論もつながるということを示唆した。

(成田節)

対照日本語研究会として初めてのオンライン開催であったが、参加者は常時40名、最後の講演では60名を超え、質問も活発で盛会であった。遠方や国外からの参加者も見られ、オンライン形式による研究会開催の意義も大きいと思われる。

(対照日本語部門)

The 30th “Contrastive Study for Japanese and Other Languages” was held on Saturday, September 12th 2020 (14.00-17.50), with lectures from Yamada Yohei (TUFS, Mongolian linguistics), Yukimatsu Hanae (TUFS, Japanese linguistics) and Hayatsu Emiko (Nagoya University of Foreign Studies, Japanese linguistics).

Yamada Yohei presented on “Verbal Negation in Mongolic Languages”. After giving an overview of the negative forms of verbs in Mongolic languages, he described their historical development. Negation in Mongolic languages was originally expressed by placing a negative form before the verb, but in modern Mongolian negation is now expressed with a form following the verb. Reasons were suggested for this language change.

In “-noda Sentences in Late Modern Edo – Research on Classical Grammar through Contrast with Contemporary Japanese”, Yukimatsu Hanae presented the results of numerous surveys and research concerning diachronic changes in the use of -noda sentences. The lecture started by examining the issues receiving attention in research on -noda sentences in contemporary Japanese and went on to emphasize the need for diachronic research. Through the case study of the development from -nosa sentences in late modern Edo to -noda sentences in contemporary Japanese, it skillfully demonstrated the insights that classical research can bring to research on modern languages.

Hayatsu Emiko's lecture, titled "The Causative Verb V-(sa)seru and Transitivity: The Lexicalization of V-(sa)seru", can be summarized as follows. Words typically are used to construct sentences but also exist prior to this as parts of speech in the lexicon. V-(sa)seru, consisting of (sa)seru affixed to a verb, also possesses these two sides. has an element of being a part and an element of being a part. The lecture examined V-(sa)seru as a grammatical part of a sentence and as a part of speech. Numerous examples were provided to show that in some instances V-(sa)seru displays causativity through form formation and in other instances displays (or is in the process of displaying) transitivity through word formation. The former, representing the majority of cases, has a grammatical function but is not a part of speech, whereas the latter is both a grammatical part of a sentence and a part of speech. Research into causatives in Japanese has an element of grammar (research on causative sentences) and an element of lexis (research on causative verbs). The two are connected through "words" suggested that V-(sa)seru can provide a connection between grammar and lexicon.

This was the first time the research meeting was held online, but with around 40 participants throughout and lots of questions the meeting was a lively occasion. The online format had the benefit of allowing participants to join from far away.

## 東アジア連続講演会 An East Asia Lecture Series



比較日本文化部門では、昨年から「東アジア連続講座」を続けている。昨年12月19日『済州と沖縄をつなぐ』のテーマのもとで、金東炫氏(文学評論家、済州大学校)をお招きした国際ワークショップを第一回として、その後以下の講座を実施した。

第二回：2020年6月26日「80年5月光州事件と東アジア」真鍋祐子氏(東京大学)、コメンテーター：孫知延(韓国・慶熙大学校)

第三回：2020年8月26日「韓国民衆美術からみる5月光州」古川美佳(朝鮮美術文化研究)、コメンテーター：稲葉真衣(韓国・光云大学校)

第四回：2020年9月9日「80年5月光州抗争と東アジア」「5・18抗争」魯永基(韓国・朝鮮大学校) コメンテーター：藤井豪(本学)

これらの講演は光州事件をその記憶、民衆美術、そしてその政治過程と軍のポリティクスからアプローチすることで、韓国国内の社会運動や文化運動から軍政の構造を多角的に学ぶ機会であった。さらにコメンテーターによる解説と話題の広がりによって、現代史の生き生きとした理解を可能にするものであった。また、毎回30名を超える参加を得て、活発な討議がおこなわれてきた。



The Comparative Japanese Culture division has been holding an East Asia Lecture Series since last year. Following the first international workshop held on December 19th 2019, where Kim Dong-hyeon (literary criticism, Jeju National University) spoke on Connecting Manchuria and Okinawa, the following events have been held.



2nd Lecture (2020/6/26): "The Gwangju Uprising in May 1980 and East Asia" MANABE Yuko (Tokyo University); commentator: SON Ji-yeon (Kyung Hee University, South Korea)  
3rd Lecture (2020/8/26): "The Gwangju Uprising Seen from Popular Art" FURUKAWA Mika (Korean Art & Culture); commentator: INABA Mai (Kyangwoon University, South Korea)  
4th Lecture (2020/9/9): "The Gwangju Democratization Struggle of May 1980 and East Asia" "The May 18th Struggle" NO Young-gi (Chosun University, South Korea); commentator: FUJII Takeshi (TUFS)

perspectives of South Korean social and cultural movements. Moreover, the commentary and facilitation of the commentators has allowed a vivid understanding of contemporary history. Each lecture has been attended by over 30 participants and featured lively discussion.

### 今後の予定

- ・比較日本文化部門主催 東アジア連続講演会第6回『沖縄と文学』  
2020年11月27日(金) 18時開始、ZOOM
- ・比較日本文化部門主催 東アジア連続講演会第7回『沖縄と戦争』  
2020年12月01日(火) 16時開始、ZOOM
- ・対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第31回研究会  
2020年12月12日(土) 14時開始、ZOOM
- ・講演会「社会的実践としての批判的談話分析」  
2020年12月21日(月) 14時開始、ZOOM  
講演：名嶋義直氏(琉球大学)  
野呂香代子氏(ベルリン自由大学)

- ・ AN EAST ASIA LECTURE SERIES BY THE COMPARATIVE JAPANESE CULTURE DIVISION  
6TH 『OKINAWA and LITERATURE』  
FRI, NOVEMBER 27TH, 2020, 18.00~@ZOOM
- 7TH 『OKINAWA and WAR』  
TUE, DECEMBER 1ST, 2020, 16.00~ @ZOOM
- ・ 31TH "CONTRASTIVE STUDY FOR JAPANESE AND OTHER LANGUAGES" RESEARCH SEMINAR, HOSTED BY THE COMPARATIVE LANGUAGE DIVISION  
SAT, DECEMBER 12TH, 2020, 14.00~ @ZOOM
- ・ "CRITICAL DISCOURSE STUDIES AS SOCIAL PRACTICE" LECTURE  
MON, DECEMBER 21ST, 2020, 15.00~ @ZOOM